

# 座位獲得前の運動（粗大・手指）の理解と関連する取り組み

下記の表は、座位獲得前の粗大運動の様子です。座位保持は、この頃になると背中を伸ばして保持できるようになり、左右への重心移動や体幹の回旋運動が可能になってきます。そして、視覚が上手く使えるようになり、視覚認知も高まり、手を使う機会が増えて、様々な試行錯誤をするようになってきます。

【粗大運動について】表 1

- ①背中を伸ばして座位保持をする。
- ②支え立位で下肢を伸展しほぼ全体重を支えることができる。
- ③座位での体幹の立ち直りが始まる。
- ④座位での前方への上肢の保護伸展活動が始まる。
- ⑤座位保持をしながら左右への回旋運動が入ってくる。
- ⑥座位での側方への上肢の保護伸展活動が始まる。
- ⑦臥位や座位からよつ這い姿勢になろうとする。
- ⑧助けをかりて座位から立ち上がろうとする。
- ⑨立位で片足をあげて歩こうとする。

【傾斜をつけて背中を伸ばした座位の取り組み】



円背傾向

ベンチに傾斜をつける



写真1の状態は、ベンチ座位を保っていますが、背中丸みが強く、骨盤も後傾しています。このような状態は、立ち上がることは難しい状況です。しかし、写真2のように少し傾斜を付けることで、骨盤や背中を伸ばした状態で座位保持を行えるようになります。このように背中丸みが軽減し前方への重心移動が少し促されることで、介助を受けて立ち上がる動作もスムーズに行えるようになります。写真3は、左側に提示された教材にリーチしている場面です。しかし、右手は座面を支持して左側に重心移動するのを妨げています。本ケースは、左側への重心移動に課題があることがわかります。

【立位保持を促すには、膝の固定がポイントになる】



器具を利用した立位



前方援助による立位

特別支援学校の指導では、座位保持が課題の児童・生徒であっても立つ練習を取り組みることが多くみられます。一人で車いすに移乗することが難しくとも、少しの援助で立位保持できれば、生活動作としてとても役立つからです。援助のポイントは、膝の位置が安定させることです。写真4の器具を利用した立位では、上肢の力も利用していますが、徐々に立位保持が安定してきます。このケースでは「へそを持ち上げて（腹を伸ばして）」と言葉かけると動作がスムーズになりました。

写真5は、車いすへの移譲の際に実施している援助場面です。教員の膝の内側で本人の膝頭を固定しています。膝が固定できないと立ち上がりが困難となります。このやり方は、多くの事例で成功しています。

参考文献：障害の重い子どもの授業づくり 4 飯野順子編著 (H23) 実態把握めやす表の活用について (諏訪)